

特別展示：ふくやま書道美術館特別展「生誕120年 桑田笹舟展」連携企画

桑田家コレクション～古筆の美

2020年4月9日(木)－6月28日(日) 会場：常設展示室 第2室

※月曜休館 ただし、5月4日(月・祝)は開館。5月7日(木)は休館。

※ギャラリートーク 4月11日(土)、5月8日(金)、6月6日(土) いずれも午後2時(第2室から)

桑田笹舟(1900-1989)は、古筆研究と料紙制作に取り組むとともに、昭和のかな書壇を牽引し、大字かな運動を推進した中心人物である。笹舟ほど平安古筆を広く究めた書家はいない。単に臨書や倣書という段階ではなく、古筆に使われている料紙研究から始まり、細部にまでわたって精密に複製本を作り上げた。その研究から生まれた成果は、古筆の真価を世に広めていった。また実践の作品制作においても、古筆を活かした作品の発表と、後進の指導にも力を注ぎ、多くの後継者を育てていったのである。

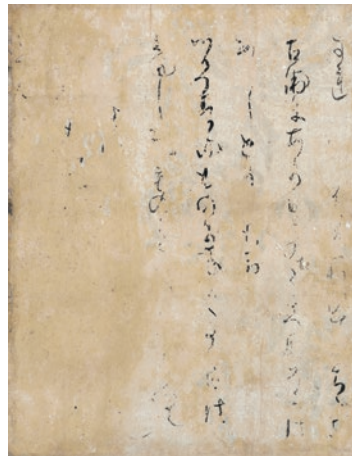
2020年(令和2年)、福山市は、孫にあたる田頭明子氏より、古筆、桑田笹舟作品合わせて96点の寄贈を受けた。中でも古筆のコレクションは、桑田笹舟から桑田三舟の代にわたって桑田家で収集された貴重な資料である。2020年は、桑田笹舟生誕120年の節目にあたり、この名品を書の愛好者だけでなく、多くの方々に鑑賞していただきたいとの思いから、ふくやま書道美術館での特別展「生誕120年 桑田笹舟展」と連携して、ふくやま美術館で初公開することになった。

古筆とは

古筆とは、「古人の筆跡」という意味で、広義には平安時代から室町時代末期までに書かれた和様の名筆をさす。かな書道においては、平安時代中期から鎌倉時代初期に書かれた、かなを中心とした美しい筆跡のことである。

古筆の分割

古筆は主に貴族文化の中で、本来、冊子や巻物という完全な形で大切に保存、鑑賞されていた。しかし、室町時代に発生した茶の湯の影響や江戸時代の古筆収集の風潮に伴い、古筆の絶対数が不足してくると次々と切断されることになった。この切断された断簡が「切」と呼ばれるもので、ここに古筆切、歌切が誕生する。古筆切は保存にも鑑賞にも不自由なため、これを収納・鑑賞するために帖(手鑑)が発達した。



右. 伝藤原定類《烏丸切》重要美術品
左. 伝小野道風《本阿弥切》

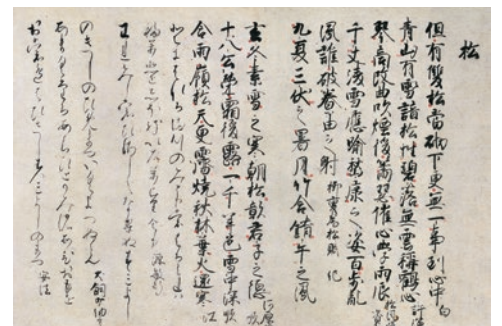


古筆の鑑定

ほとんどの古筆には、いつ、どこで、誰が、何のためにといった年紀や落款がないため、本来ならば筆者はわからないはずである。江戸時代の古筆収集ブームに乗って古筆鑑定家・古筆見という専門家が登場し、鑑定の結果を記した「極札」を発行した。極札は、鑑定した筆者名と古筆切の書き出し語句を記し、下方に「極印」を捺した小さなカードで、これを発行できる専門家が、古筆鑑定における権威となっていた。

古筆の内容

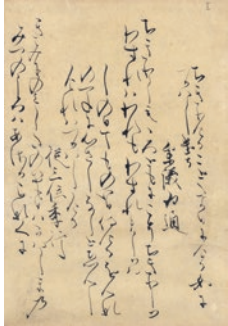
古筆の中身は、歌集・物語・その他で、各種の筆跡に及ぶ。古代からの文書や記録類をはじめ、仏教の経典を書写した写経、漢詩や和歌あるいは物語などが書かれたもの、手紙(消息・書状)など、たくさんの筆跡が残されている。かなを学ぶ上で重要なものは、韻文作品の和歌集を書写したものばかりである。歌集はその性質によって、勅撰集・私撰集・私家集・歌合などに分けられる。桑田家コレクションの中で、勅撰和歌集の断簡は「本阿弥切古今和歌集」「烏丸切後撰和歌集」「龍山切千載和歌集」「円山切新古今和歌集」、撰者の藤原俊成自筆本「日野切千載和歌集」である。また、平安朝貴族が勅撰和歌集に次いで重用した『和漢朗詠集』の断簡である「山城切」が注目される。



筆者末詳《山城切和漢朗詠集》

古筆の名称

古筆には、いろいろな固有名がついている。伝来の名物切もあれば、比較的新しく名付けられたものもある。「烏丸切」や「日野切」のように所蔵者に由来するものもあれば、伝来や所在地、分割地に由来するもの、その他にも、書きぶり、料紙の特徴、内容、装丁、分割された時期、書写年時に由来するものなど、さまざまに分類できる。



藤原俊成《日野切》



伝冷泉為相《詞花和歌集切》

学書としての古筆

かなを学ぶものにとって、古筆は字形や線質を学び、連続およびそれに伴う字形の変化や筆線の省略などを学ぶのに最適である。

学習の方法としては、古来「臨摸」という手法がある。「臨」は、見て写す「臨書」のこと。「摸」とは、原本を下に置き、その上に薄い紙を重ねて写しとる「摸書」のことである。「臨書」では、形を真似るだけでなく、筆の勢いや流れ、墨量の多寡や墨色の変化を感じ取り学んでいくのである。書を学ぶ基本は臨書であるが、そこから自分の作品制作に進んでいく段階として、作者の個性も引き出し養うために、笹舟が提唱したのが「倣書」である。習いこんだ古筆から文字を集め集字帖を作る。その中の文字を、自分が書こうとする歌、語句に合わせて並べていく。文字選択の過程で頭を働かせ、自分の作品のイメージを高めながら一字一字に思いを込めていく。出来上がった原稿を見ながら作品制作に移っていくのである。

古筆に魅せられた笹舟は、古筆の書かれている料紙の研究も究めていく。古筆に書かれている文字が生きて見えるのは、書かれている料紙の上だからである。料紙、筆、文字とはすべて響き合い調和しているから美しい。古筆料紙の再現から、現代作品への料紙制作へと生涯をかけて研究に没頭した笹舟の原点がここにある。(ふくやま書道美術館 副館長 中川公二)

第2室 『桑田家コレクション～古筆の美』

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横 (cm)
1	伝藤原定頼	995-1045	重要美術品 烏丸切	12世紀	紙本墨書	20.7×12.4
2	伝小野道風	894-966	本阿弥切	12世紀	紙本墨書	16.0×12.8
3	筆者未詳		山城切和漢朗詠集		紙本墨書	27.5×37.3
4	藤原俊成	1114-1204	日野切	12-13世紀	紙本墨書	22.1×15.5
5	筆者未詳		古今和歌集切		紙本墨書	18.2×13.0
6	伝冷泉為相	1263-1328	詞花和歌集切	14世紀	紙本墨書	22.2×14.7
7	筆者未詳		龍山切		紙本墨書	15.3×14.2
8	筆者未詳		源氏物語切	13世紀	紙本墨書	15.7×15.7
9	筆者未詳		伊勢物語切	17-18世紀	紙本墨書	15.8×15.8
10	筆者未詳		拾遺愚草員外切	17世紀	絹本墨書	35.5×5.3
11	筆者未詳		後撰和歌集切	13世紀	紙本墨書	20.8×13.7
12	筆者未詳		後拾遺和歌集切	13世紀	紙本墨書	23.0×14.7
13	筆者未詳		松風切	1654年	紙本墨書	25.8×45.6
14	飛鳥井雅章	1611-1679	新年和歌懐紙	17世紀	紙本墨書	34.1×51.4
15	近衛信尹	1565-1614	小色紙	16-17世紀	紙本墨書彩色	18.5×17.7
16	近衛信尹周辺		和歌色紙		紙本墨書	18.1×15.5
17	筆者未詳		和歌集切	13世紀	紙本墨書	22.0×14.6
18	道助法親王	1196-1249	道助法親王家五十首切	13世紀	紙本墨書	22.3×14.5
19	慈円(慈鎮和尚)	1155-1225	円山切	12-13世紀	紙本墨書	16.8×15.5
20	筆者未詳		林葉和歌集切	14世紀	紙本墨書	19.0×18.8
21	伝飛鳥井雅親	1417-1490	三十六人歌合	15-16世紀か	紙本墨書金泥	23.7×252.2
22	伝藤原良房	804-872	古今和歌集切	9世紀	紙本墨書	24.3×15.7
23	細井広沢	1658-1735	寒食	17-18世紀	紙本墨書	28.8×793.4
24	巻菱湖	1777-1843	文選より	18-19世紀	紙本墨書	130.2×52.5
25	賛:尾藤二洲 画:谷文晁	1745-1814 1763-1841	朱熹像	18-19世紀	紙本墨書淡彩	91.0×28.0
26	日下部鳴鶴	1838-1922	行書五言絶句軸(御題海辺松)	1920年	紙本墨書	133.5×33.0
27	丹羽海鶴	1863-1931	行書孟浩然五言絶句軸(春晓)	19-20世紀	紙本墨書	137.4×34.0
28	今井景樹	1891-1967	旭日図	20世紀	紙本着色	117.5×27.2
29	長三洲	1833-1895	七言絶句軸	19世紀	紙本墨書	111.0×29.1
30	山本竟山	1863-1934	一行書	1931年	紙本墨書	134.5×22.0
31	王一亭	1867-1938	雲靈異彩	1933年か	紙本墨書	46.0×33.0
32	王一亭		柳樹双蝉図		紙本墨書	132.0×33.0
33	呉瑤華	生没年未詳	瓢筆図	1935年	紙本墨画淡彩	46.0×33.0
34	作者未詳		寿老人図(刺繍)		紙本、糸	89.0×34.0
35	杜氷	生没年未詳	農家清品		紙本着色墨書	68.1×33.8